

1. 2024年度は富岡高校と沼田高校で学級減

6月19日の県教育委員会で、令和6年度の募集定員が決められました。男女共学・地域の中核校として6年目を迎える富岡高校が240人→200人、令和7年度に沼女との統合が決定している地元の中核校である沼田高校が160人→120人と2校で学級減となります。その理由を高校教育課は「中学校の卒業見込者数の減少が85人で、これに対応するため」と説明しています。

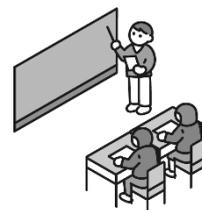
2. 志望倍率0.99倍(全日制課程・フレックススクール)の中身を見ると

	後期募集定員	志願者数	倍率	1倍未満	再募集	再募集定員	志願者数
2022年度	6453人	6419人	0.995倍	31校	25校	724人	91人
2023年度	6344人	6276人	0.989倍	35校	30校	837人	115人

過去2年間の入試状況を見ると、1倍を切る学校と再募集をする学校が増えています。2023年度では、後期志願者ゼロが2校、再募集志願者ゼロが6校、1～5名が17校で、再募集で1倍を超えたのは1校だけでした。入試一本化は必然の結果ですが、再募集のあり方も見直す必要があります。

3. 進む公立離れ

県内全日制公立高校への希望者数は、2017年10月調査では14721人(78.65%)でしたが、2022年10月調査では12324人(71.88%)に減少しています。約7ポイント下落していますが、その約半分が県内全日制私立高校の上昇となります。また、注目すべきは「その他希望者」の急増です。2017年では421人(2.25%)でしたが、2022年では727人(4.24%)と306人も増加しています。2022年12月調査ではさらに803人まで増えていますから、この傾向は今後も続くと考えられます。では「その他希望」とは何かというと、その多くが広域通信制高校を含む通信制高校に他なりません。少子化による生徒数の減少よりも、公立離れが進んでいる方がより深刻なのです。卒業見込者が85人減るから2学級減といった場当たりの対応ではなく、公立高校の教育条件整備を加速させ、その魅力をアピールすることが県教委の任務であると考えます。



4. 組合が求めること

2021年に県教委が策定した「第2期高校教育改革推進計画」には、高校現場から見ても推進してほしいと思うことが多く含まれています。例えば、「不登校経験を持つ生徒や障害のある生徒、外国人生徒など、多様な生徒が在籍することから、全ての高校生が安心して高校教育を受けられる体制づくり」を進めていくことが必要だと認めている点です。そのために、「スクールカウンセラー配置や通級による指導、合理的配慮の提供について一層の充実を図る」とも述べています。最初から通信制高校を選択する生徒が増えていますが、公立高校に入学した後に通信制高校に進路変更する生徒も多くいます。生徒本人も保護者の方も、本当は公立高校を卒業し、その後の進路を確保したいという思いが強いのではないのでしょうか？通信制高校は卒業したが、進路指導もなくニートやフリーターになることを望んでいる人は少ないのではないのでしょうか？公立高校だからこそできる、生徒一人ひとりを大事にしたきめ細かい指導を手助けする施策を、県教委には求めたいと思います。

また、「第2期高校教育改革推進計画」では、「農業科、工業科等については、より充実した学びを実現するため、学級定員の引下げについて検討します」と述べています。現状では中等教育学校や2学級の学校に加え、再募集校の多くで少人数学級となっています。数年前の工業高校学級減では、2クラスある機械科を1減にして学科減を避けた学校、2つの科を合体して1減にした学校がありましたが、学科を維持するためには定員を引き下げる必要があると県教委も認めているのです。普通科や商業科の学級減をやった後に農業・工業の定員減では遅すぎます。本来なら入試一本化を迎える今の段階でやるべきでしたが、それが無理ならせめて来年6月には農業・工業の定員減を決定するよう、県教委には求めたいと思います。そのためにも、「学級減・学校減ではなく学級定員の削減を」の声を、現場や地域から広めていきましょう。

『みんなのまど』への感想を送ってください。

右のQRコードから、アンケートフォームにつながります。

『みんなのまど』を通じて職場内で交流できるよう、みなさんの声を紙面に生かしていきたいと思っています。ぜひ感想をお寄せください。

